

# 大学生を対象とした「障がい者スポーツ」の指導に関する研究

著者	和 史朗, 松村 美佳子, 瀧澤 聡
雑誌名	北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報
巻	6
ページ	97-102
発行年	2015
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002123/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002123/</a>

# 大学生を対象とした「障がい者スポーツ」の指導に関する研究

Study of Adapted Sports Program for University Students

和	史	朗	松	村	美	佳	子	瀧	澤	聡
Shiro		NIGI	Mikako	MATSUMURA				Satoshi	TAKIZAWA	

北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報 第6号 2015

Bulletin of the Northern Regions Lifelong Sports Research Center Hokusho University Vol. 6

## 大学生を対象とした「障がい者スポーツ」の指導に関する研究

### Study of Adapted Sports Program for University Students

和 史 朗<sup>1)</sup> 松 村 美佳子<sup>2)</sup> 瀧 澤 聡<sup>1)</sup>

Shiro NIGI<sup>1)</sup> Mikako MATSUMURA<sup>2)</sup> Satoshi TAKIZAWA<sup>1)</sup>

キーワード：障がい者スポーツ，指導者養成制度，プロ野球

#### I. はじめに

平成23年に制定された『スポーツ基本法』の前文には、スポーツについて「今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠なものとなっている。スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人の権利であり、全ての国民が自発性の下に、各々の関心、適性に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しむ、またはスポーツを支える活動に参画することができる機会が確保されなければならない」と記している。「全ての国民」が示す内容は、言うまでもなく幼児から高齢者まで、また、様々な障がいを持つ人々も含んでいる。しかし、重度障がいのある人が取り組めるスポーツは極めて限られており、こうした重度障害のある人が「各々の関心、適性に応じて」スポーツに取り組む機会が確保されるためには課題も多いと言えよう。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控えた我が国の今後のスポーツ施策において、障がい者スポーツの振興は喫緊の課題であり、重度障害者の参加にも配慮しつつ、障がい者がスポーツに取り組めるための環境整備が求められる。

#### II. 障がい者スポーツ指導者養成制度

##### 1. 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会の事業

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会では、公認指導者制度を制定し、わが国における障がい者のスポーツの普及と発展をめざして障がい者のスポーツ環境を構築する上で必要な人材の養成並びに資質向上を図るための研

修事業を行なっている<sup>1)</sup>。指導者の養成事業は、その中心的事業であり、協会が公認する障がい者スポーツ指導者を養成するための講習会を各地で実施している。

##### 2. 障がい者スポーツ指導員資格取得認定校制度

障がい者スポーツ指導員資格取得認定校制度とは、学校教育法に基づく大学、短期大学及び専門課程をおく専修学校のうち、指導者制度に定める条件を満たしていると障害者スポーツ協会が認めた学校において障害者スポーツ指導員の資格が取得できる制度で、初級障がい者スポーツ指導員資格は修業年数2年以上、中級障がい者スポーツ指導員資格は修業年数4年以上の学校が対象となっている。

平成26年度現在、全国で170校の大学、短期大学、専門学校が日本障がい者スポーツ協会からの認定を受けており、中級障がい者スポーツ指導員養成認定の24校、初級障がい者スポーツ指導員養成認定の146校に障がい者スポーツ指導員養成課程が設置されている。全170校を学校分類別に見た内訳は、4年制大学が81校（中級指導員養成課程24校、初級指導員養成課程57校）、短期大学18校、専門学校71校となっている。

北海道においては、5校が初級障がい者スポーツ指導員の資格認定校となっている。そのうち4校は保健や福祉、スポーツ系などの専門学校であり、北海道の大学、短期大学で障がい者スポーツ指導員の資格が取得できるのは北翔大学のみである。

#### III. 北翔大学における初級障がい者スポーツ指導員養成

##### 1. 北翔大学の障がい者スポーツ指導員養成プログラム

北翔大学は、日本障がい者スポーツ協会から初級障が

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北翔大学大学院生涯スポーツ学研究所

表1 初級障がい者スポーツ指導員の役割

**初級障がい者スポーツ指導員**

地域で活動する18才以上の指導者で、主に初めてスポーツに参加する障がい者に対し、スポーツの喜びや楽しさを重視したスポーツの導入を支援する者。

また、障がいの基本内容を理解し、スポーツの導入に必要な基本的知識・技術を身につけ、実践にあたっては、健康や安全管理を重視した指導ができる者。

さらに、地域の大会や行事に参加すると共に、指導員組織の事業にも積極的に参加するなど地域の障がい者スポーツの振興を支える者。

い者スポーツ指導員資格の認定を受けている。初級障がい者スポーツ指導員の役割について、日本障がい者スポーツ協会は表1のように記している。

また、日本障がい者スポーツ協会の定める初級障がい者スポーツ指導員養成の基準カリキュラムは表2の通りであり、養成課程を申請する大学等は、日本障がい者スポーツ協会の基準カリキュラムに該当する学内開講科目及びその時間数、開講年次等を示し、講義内容のシラバスを提出して日本障がい者スポーツ協会の認定を受けなければならない。日本障がい者スポーツ協会の基準カリキュラムに対応する北翔大学の学内開講科目を表2に示した。北翔大学で開講する2科目は、本研究報告の第一著者である和が担当し、アシスタント・ティーチャーとして第二著者である松村が授業準備や指導補助、ゲームの審判等も担当した。

## 2. 「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」指導の実際

### (1) 履修登録者数及び開講時間

平成26年度の「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」の履修登録者は97名であった。スポーツ実技の授業を行うにあたっては、種目に応じた適正な人数で効率良く指導することが指導者に求められる。「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」で実施予定の種目の特性や授業で使用する道具の状況から、学籍番号をもとにした所属クラスごとに、ABクラス（月曜日1講；42名登録）とCD

クラス（金曜日1講；55名登録）の2コマに分けて授業を展開した。本研究報告は、この2コマの授業のうち、履修人数の多かったCDクラスでの授業の取り組みについて報告した。

### (2) 授業展開

#### 1) 授業ガイダンス（第1回）

授業の冒頭で、この日受講した48名の学生を対象に「この科目の履修動機」についてのアンケート調査を実施した（アンケート①）。アンケート①は、学生による自由記述方式とし、複数回答も可とした。

アンケート①を学生が記入した後、シラバスに記した「講義の目的」を学生に示し（表3）、講義概要について説明した（表4）。実技で扱う表4の各種目は、3年次後期開講の「障がい者スポーツ論」において、映像も含めて紹介してきたものが多く含まれていたが、授業ガイダンスの中で改めて説明を加えた。その後、表4の内容を参考に「やってみたい種目」についてのアンケートを実施した（アンケート②）。なお、アンケート②では、表4に記されていない種目でも記入可とした。

アンケート①の結果は、学生の記述内容にもとづいて回答をカテゴリー化して分類した。その結果、学生の履修動機は、「資格取得のため」が31名と最も多く、次いで「障がい者スポーツを実際に体験したかった／興味があった」「希望する進路に関連した内容だから」「3年生のゼミでも体験して楽しかった」等の内容が続いた（図1）。

アンケート②の「やってみたい種目」の結果は、「ブラインドサッカー」が最も多く、次いで「車いすバスケットボール」「グランドソフトボール」が多かった（図2）。

学生の回答からは、サッカー部の学生が「ブラインドサッカー」を、野球部の学生が「ゴロ野球」を、バレーボール部の学生が「シッティングバレーボール」を選択する割合が高いなど、日頃から部活動などでそれぞれの

表2 北翔大学における初級障がい者スポーツ指導員養成カリキュラム

日本障がい者スポーツ協会の定める基準カリキュラム	北翔大学における開講科目名	開講年次
障がい者福祉施策と障がい者スポーツ（2時間）	障がい者スポーツ論	3年後期
ボランティア論（2時間）		
障がい者スポーツの意義と理念（2時間）		
安全管理（1時間）		
障がいの理解とスポーツ（5時間） ※身体障害（内部障害含む）2時間以上、知的障害2時間以上、精神障害30分以上		
（公財）日本障がい者スポーツ協会公認障がい者スポーツ指導者制度（1時間）		
全国障害者スポーツ大会の概要（1時間）		
障がいに応じたスポーツの工夫・実施（実技）（2～4時間）	生涯スポーツ （障がい者スポーツ）	4年前期
障がい者との交流（実技）（2時間）		

表3 生涯スポーツ（障がい者スポーツ）授業の目的

## 講義の目的

スポーツの取り組みは、我々の生活を支えるものであり、特に余暇活動の充実においても重要な役割を果たしています。本講義では、実際に障がいのある人達が取り組んでいる様々な障がい者スポーツを実技体験することで、障がい者スポーツの楽しさを知り、障がいのある人の現在及び将来の生活の充実のためにスポーツが果たす役割や、競技を行う上での配慮事項についての理解を深めることを目的とします。

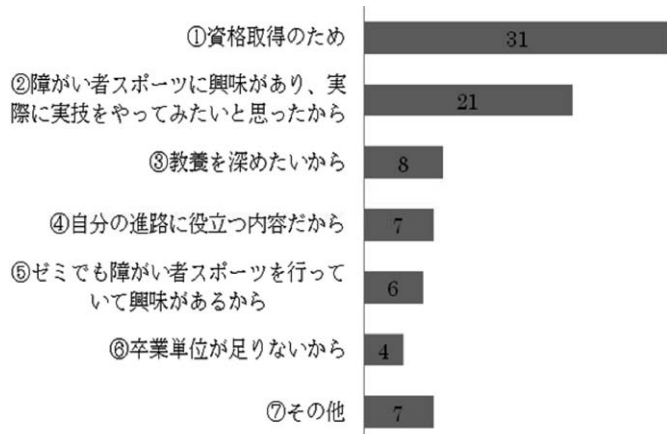


図1 「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」履修動機

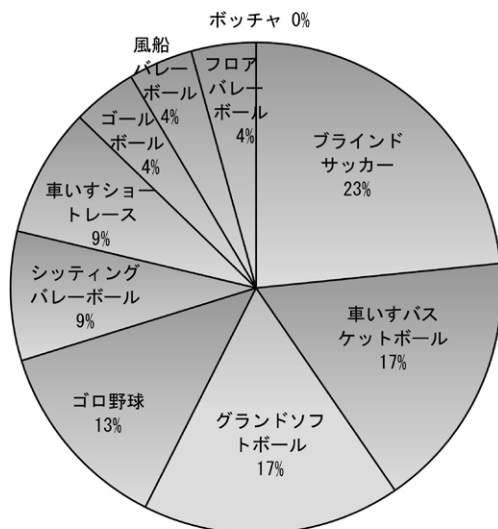


図2 学生が選択した「やってみよう目」

学生が取り組んでいた種目に関連する障がい者スポーツ種目を選択した割合が多かった。

## 2) 障がい疑似体験（第2, 3回講義）

第4回の講義以降実施する障がい者スポーツ実技の事前学習として障がいの疑似体験学習を行った。

視覚障がい疑似体験学習では、アイマスクを着用した歩行練習や、コーラーの指示を聞いて行動する学習等を行った。肢体不自由疑似体験では、車椅子の基本操作等の学習を行った。

## 3) 障がい者スポーツ実技（第4回～第14回講義）

表4 生涯スポーツ（障がい者スポーツ）講義概要

第1回	オリエンテーション ～やってみよう目アンケート
第2回	視覚障害疑似体験
第3回	肢体不自由疑似体験
第4回	肢体不自由者のスポーツ（1）車いす走（ショートレース）
第5回	障害者と健常者の交流～風船バレーボール
第6回	重度肢体不自由者のスポーツ～ボッチャ（1）
第7回	重度肢体不自由者のスポーツ～ボッチャ（2）ランブス利用
第8回	視覚障害者のスポーツ（1）フロアバレーボール
第9回	視覚障害者のスポーツ（2）ゴールボール
第10回	視覚障害者のスポーツ（3）グラウンドソフトボール
第11回	肢体不自由者のスポーツ（2）ゴロ野球
第12回	肢体不自由者のスポーツ（3）車いすバスケットボール
第13回	肢体不自由者のスポーツ（4）シットイングバレーボール
第14回	視覚障害者のスポーツ（4）ブラインドサッカー
第15回	講義のまとめ

11回の授業で10種目の障がい者スポーツを実技体験した。様々なスポーツをより多く体験することを重視し、基本的には1回の授業で1つの種目を扱うようにした。第6回と第7回の授業で実施した「ボッチャ」のみ、ルール把握の学習とアシスタントとコミュニケーションを図りながら投球補助具（ランブス）を使用する学習の2回に分けて実施した。

実技の毎回の授業では、授業冒頭でその種目の内容に関する資料を配布して、コート大きさや競技規則について説明した。その後、男女比率を均一にした男女混合によるチーム分けを行い、競技規則に準じたコートの設営も教員の指導のもとで学生が行った。毎回20～30分程度の時間を割いて実施種目の練習を行った後、最後は必ずゲームを行い、チームごとの順位を競い合うように授業を設定した。また、毎回の授業で優勝チーム及び上位入賞チームには授業の実技得点を加算するインセンティブ制度を導入した。

ゲーム終了後に学生は、①競技を行うにあたって工夫した点 ②種目を体験しての感想 をレポート用紙にまとめて毎回提出した。

## （3）実技10種目終了後の事後アンケート

第14回目の授業で実施したブラインドサッカーの実技をもって授業計画における10種目の実技を全て終了した。この日のレポート用紙には、実施してきた10種目の中から「もう一度やりたい種目」に順位をつけて3種目選んで学生に記入させて回収した（アンケート③）。

その結果、学生が選んだ「もう一度やりたい種目」で最も多かったのは男女ともに「ゴロ野球」であった。次いで「車いすバスケットボール」「ボッチャ」が多かった。

事前アンケートで多くの学生が「やってみよう目」としてあげたブラインドサッカーを希望したのは、女子の1名のみであった。事前アンケートで「やってみよう目」の4位だった「ゴロ野球」が1位に、事前アンケー

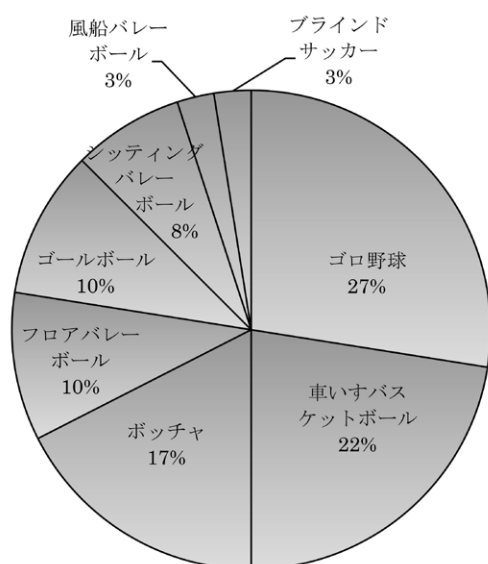


図3 学生が選んだ「もう一度行いたい種目」

トでは一人も「やってみたい種目」にあげず、最も実技への期待の少なかった「ボッチャ」が事後アンケートでは4位に入る結果となった。

#### Ⅳ. 考 察

##### 1. 授業後の提出レポートの内容から

事後アンケート（アンケート③）で、もう一度やりたい種目としてあげた学生が一番多かったのは男女ともに「ゴロ野球」であった。「ゴロ野球」は、障がいの状態に応じて個別ルールが適用されるベースボール型競技で、肢体不自由の状態が重度の子ども達でも参加が可能な種目である<sup>2)</sup>。四肢麻痺やアトローゼタイプの脳性まひ児、進行性筋ジストロフィー症といった重度の運動障害のある子ども達が多く在籍している肢体不自由特別支援学校で行われてきている。

どのような視点から学生が「ゴロ野球」を選択したのかを探るために、第11回目の講義で行った「ゴロ野球」の授業後の学生の感想を整理した。内容は以下の通りであった（抜粋）。

- 初心者でもすぐできてとても楽しい（女子）
- 野球経験者もそうでない人も全員が楽しめるスポーツであった（男子）
- 大勢で楽しめた（女子）
- 実際にやってみて相当楽しかった（女子）
- ルールがわからなくても周りの人がどこにボールを送球するのか声かけしてくれたり、ゴロ処理のカバーに入ってくれたりして楽しめました（女子）
- 男女差もさほど関係なく楽しめる（女子）
- 人数が多く、チームでプレーすることはとても楽しい

##### （男子）

- 健常者、障がい者、高齢者など誰もが楽しめる（男子）
- 車いすに乗りながら野球をすることで経験の有無に関わらず全員が楽しめるスポーツだと思いました。障がいを抱えていても野球のルールや楽しさを理解できるスポーツだった（男子）
- 車いすに乗っていても野球は楽しいものだと思えてわかった（女子）
- 障がいに応じてルールを変えれば様々な人が楽しめてよいと思いました（男子）
- ルールを少し工夫することで野球というスポーツを誰でも楽しめる（男子）
- ルールを変えれば色々な人が色々な楽しみ方ができるとわかりました（男子）
- 練習をすることによって上手になっていく喜びを感じられると思いました（男子）
- すごく楽しいので広まって欲しい（女子）
- 今回は全員上肢が普通に使えていたが、もし使えなかったりする人がいた場合など、その人の動ける範囲や動きやすいポジションに配置するなど戦略が大事になると思った（男子）
- 野手の人数配置や守備位置を工夫することによって楽しめるということに気がつきました（男子）
- 今日を機会に野球に少し興味がわきました（女子）

「ゴロ野球」を受講した35人のうち28名の感想用紙に「楽しかった／楽しい」「面白かった」というコメントが見られた。全員が車いすに乗ることで、野球経験の差や男女間の体力差が小さくなり、多くの学生が対等に勝負できたという実感を持っていることがわかった。

その一方、授業の事前アンケート（アンケート①）で「やってみたい」という学生が最も多かったブラインドサッカーは、事後アンケートで「もう一度やりたい」種目にあげた学生の人数は1名と極めて少ない結果であった。ブラインドサッカーは、実技授業の最終回（第14回）で実施したが、授業後の学生の感想のコメントシートには「これまでの種目の中で一番難しかった」という内容がかなり多くの割合を占めていた。視覚を遮断し、音を頼りに競技するブラインドサッカーは、ボールコントロールやゴールに向けたシュートにかなり高度な技術が求められる。そのためブラインドサッカーは、他の種目と比べても難易度が高い競技であると言え、技術の習得にかなりの時間を要する種目であると考えられる。1度の授業のみでは学生がプレーを楽しめるまでのスキル獲得に至らず、その結果が事後アンケートに示されたものと考えられる。

このように、学生がブラインドサッカーの難しさを実

感した反面、逆に「ブラインドサッカーの選手がどれだけすごいのがわかった」という感想も多数見られた。ブラインドサッカーは、前年度の「障がい者スポーツ論」の講義で紹介し、学生にはビデオ視聴の機会も提供済みであった。「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」で実際に学生自身が実技体験してみたことで、ブラインドサッカー選手の技術の高さや日頃の凄まじい努力について知る良い機会となったものと思われる。また、「コーラーの役割の大切さがよくわかった」という感想も多かったことから、障がい特性に応じたルール工夫の大切さや支援の重要性についても学ぶ良い機会となったように思われる。

## 2. 講義最終回の学生の感想欄の記述から

15回目の授業の提出レポートの中から、15回の授業全体を振り返る内容に言及していたものについて以下に示す。

- 授業を通して障がいをもつ人の困難やもどかしさが理解できました。しかし、その困難があってもスポーツをすることができるし、そのスポーツにやりがいを感じることができました。(男子)
- どう環境を作ればできるのか、どうルールを工夫すればできるのか、また、どう支援すればできるのかを学ぶことができました。(男子)
- 障がい者スポーツがもっと普及すれば多くの人の生活が充実すると感じた。(男子)
- 障がいの有無でスポーツの出来る、出来ないが決まるのではなく、どう皆で出来るスポーツにしていけるかを考えていくことが大切だとこの講義で学ぶことができました。(女子)
- どんなに難しくても皆が楽しめる方法は必ずあるので、その方法を常に考えていけるようにします(女子)
- 障がい者スポーツの各種目の面白さを感じて来れた。(女子)
- これまで色々な競技をしてきたが、色々な人たちが色々な形でスポーツを楽しめるようになっていくことが体感できて、やはりスポーツっていいなと思った。(女子)
- 15回の授業を通してスポーツの大切さ、楽しさを学びました。それほど話したこともない人とも距離が近くなって、とっても嬉しかったです(女子)
- 色々な種目をたくさんやり、障がい者スポーツの魅力をつかむことができて、とても興味がわきました。(女子)
- 障がい者スポーツにこれだけの種目があるなんて知らなかったし、とても難しいということが実際にやってみることでわかりました。見ているだけではわからないことも体験してみると見えてくるのがたくさんあると感じました。(女子)
- この講義を通して身体的な制限があってもスポーツは楽しいことを身をもって実感させていただきました。多くの人にこの楽しさを伝えたいです(女子)
- とにかく楽しく授業に参加できました。機会があればまたやりたいです。(男子)
- とても楽しく行えたし勉強になった。(男子)
- これまで楽しい授業をしていただきありがとうございました。この授業は自分にとって癒しの時間で本当に楽しかったです。(男子)
- 障がい者スポーツは障害者の気持ちにもなれるし自分自身も楽しめる。実際にやってみることでどう支援すれば良いのかわかるしお互いが一つになってとても良いと思った。(女子)
- 全ての種目に楽しく参加できました。普通の種目とは違う難しさがあるのに、障がいの有無に関係なく行えるとても良いスポーツだと感じました。(男子)
- コーラーの経験などを通して、どのような声かけや工夫が大切なのかなども学ぶことができ、楽しい上でとても学びの深いものになりました。(男子)
- とても楽しい実技の授業でした。(女子)
- 少し工夫することで、障がいがあっても楽しめる障がい者スポーツ、とても勉強になり楽しかったです。(男子)
- 障がい者スポーツを15回やってみて、全ての競技を楽しく、熱くやれることができた。ルールを少し工夫し、障がいを抱えている人たちでもこれだけ楽しみ白熱することができる。スポーツの力は本当に素晴らしいと改めて実感した。(男子)
- 適切な支援とルールを変更したりするだけで誰でも参加できるスポーツなので教師になった後も関わられたらと思います。(男子)
- 色々な種目をやれてとても楽しかった。いい経験をすることができた。(男子)
- 全講義を通してとても楽しめて良かった。(男子)
- 15回の講義の中で難しさとともに楽しさを感じることができました。(男子)
- 15回の授業楽しかったです。ありがとうございました。(男子)
- 毎週楽しく出来ました。この授業をとって良かったです。(男子)
- ビリだったけど楽しかったです。ありがとうございました。(女子)
- 楽しかったです。ありがとうございました。(女子)

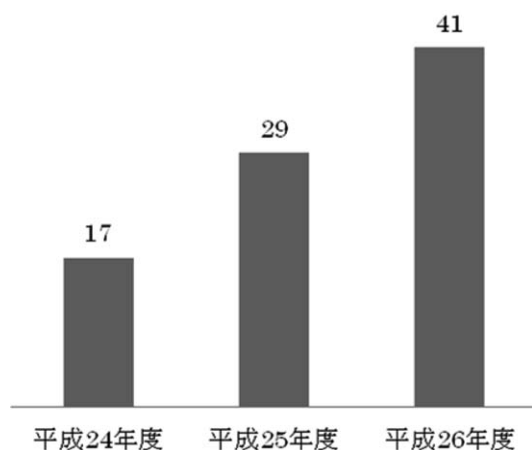


図4 初級障がい者スポーツ指導員資格取得者の推移

初級障がい者スポーツ指導員の役割の一つに「主に初めてスポーツに参加する障がい者に対し、スポーツの喜びや楽しさを重視したスポーツの導入を支援する者」とある（表1）。今回のアンケート結果から、生涯スポーツ学部には「生涯スポーツ（障がい者スポーツ）」の授業を通して、学生達がスポーツの喜びや楽しさを重視したスポーツの導入を支援するといった日本障害者スポーツ協会の設定した役割を担う力を身につけているものと考えられる。

## V. まとめ

北翔大学が日本障がい者スポーツ協会の認定を受け、障がい者スポーツ指導員の資格取得者を出すようになって平成26年度で3年目を迎えた。平成24年度に北翔大学で初めてこの資格を取得した学生は17名であり、翌平成25年度の資格取得者が29名、平成26年度の資格取得者は41名であった。日本障がい者スポーツ協会の認定校となって以降、資格取得者の数は徐々に増えている。生涯スポーツ学部の卒業生には「スポーツの専門家」として、地域で生活する様々な人々の生涯スポーツを推進する役割が求められ、障がいのある人の生涯スポーツの取り組みを支援する役割が今後も大いに期待される。

## 付 記

本研究は、平成26年度北方圏生涯スポーツ研究センター事業の助成を受けて実施されたものである。

## 文 献

- 1) 水原由明：公益在団法人日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ指導者制度について。（公財）日本障害者スポーツ協会編 障害者スポーツ指導教本

初級・中級〈改訂版〉. pp.115-118, ぎょうせい, 東京, 2009.

- 2) 和 史朗：重度障害者を対象としたアダプテッド・スポーツの取り組み—肢体不自由特別支援学校における野球指導を通して—, 北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報, 2: 57-62, 2011.